練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第５回）「心の教育の推進」部会　要点録

開催日時		平成21年８月28日(木)　午後４時00分～午後５時40分
会　　場		練馬区役所本庁舎11階　1102会議室
出席者	委　員	生越詔二、石原正義、佐藤宏、久能正吾、一ノ瀬秀治、山崎高志 濱元雅俊、相田真人、小林昭文（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	栗原健　指導主事

１　挨拶

部長

さて、今日はだいぶ具体的なことに入っていくと思う。日本教育会で出している本に「自尊と惻隠の心の育成のあり方」というのがあった。ここで出てくる自尊感情のことと、惻隠の心とは簡単にいうと思いやり。それを大切にしていかなければいけない。例えば新渡戸稲造が『武士道』の中で「惻隠の心は仁の端なり」と、孔子のいう仁。惻隠という言葉は孟子から出ており、惻隠の心とは「人が困っているのを見聞きして、自分のことのように思い、相手の気持ちになって深く思いをいたす心」とある。見ると幼稚園、小、中、高で教育の取り組みとか、どうやって育てていけばいいかが書かれていて参考にはなると思った。

アドバイザー

ただいまの孟子の話、この部会にふさわしい話かと思った。今朝の新聞に、小中学校の学力調査の問題が出ていた。学力の問題についても、心というものがあって当然。けれども、報道ではほとんどそれに触れられていないところに、個人的には非常に偏りを感じる。

事務局

ほかの部会の状況についてお伝えする。「体力の向上」部会は、「体つくり」の部分をカリキュラムの中に取り入れようと考えている。核となる体育だけに特化してしまうと、体育の指導計画になってしまうということがあるようだ。「キャリア教育の推進」部会は、幅広くさまざまな教科または総合的な学習の時間、特別活動の中で、どんな活動例が考えられるかというところからスタートしている。「表現力の育成」部会は、発表の場をまずカリキュラムの中心として入れていくということ。そうすると、教育課程上の位置づけは総合的な学習の時間が多くなるのではないかと考えている。９月中にはその一覧表が各部会ででき上がると思う。

今年度作るものとしては、第１回でプロット案を配った内容。来年になって単元ごとの指導計画、すぐ授業ができる資料作成までいければと考えている。それから、教師用指導資料と子どもが使うテキストを来年度作るとすればどんなものか。見通しとして経費がかかりそうなものがあるのかないのか。そういったことについても、意見交換ができればと思う。

２　協議

委員

今日話し合っていくことの確認。今年度作成する資料について、以前に１年次~~時~~の報告書プロット案が出た。それについて話し合っていくことと、もう一点が来年度さらに具体的な指導資料等、冊子等を作っていく上で予算的な裏づけとなるもの、構成等を話し合っていく。

本部会で重視する指導項目で、規範意識、生命尊重、自尊感情、思いやりの心、社会連帯ということで、前回決めた。また重点項目以外についても取り入れたらいいのか。重点項目はこの５点で進めていきたい。

委員

実施時期とは、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のどこの時点でこの五つをとくに扱うかということではないか。ただ、生命尊重などはどこでもやらなければいけないと思う。社会連帯とか規範意識はⅢ期あたりの中学校を卒業する段階で、もう少し高度な部類で入っていくと思う。小学校１年生では、規範意識とか社会連帯は難しいと思う。

委員

どの柱もⅠ期からⅢ期まで続けてやるが、とくに社会連帯の自覚に関する項目が多い印象を受けた。それは道徳でも扱うし、学校行事とか地域のお祭りとか、地域性がそこで出てくるのではないか。そこで小中一貫のその学校なりの特色を出せるようにしておくといい。

それ以外の自尊感情、生命尊重、規範意識、思いやりの心は、だいぶ数が限られていると思うので、年に２回以上はやるとしておけばいいと思う。年２回程度だったら、年 35 時間でやらない内容項目はない。自尊感情、生命尊重、規範意識、思いやりの心は、２回やって重点化するという意識でやれるといいと思った。

書式案として規範意識でやってみた。中１になるところで携帯電話を持つ子がぐっと増えるという話を聞き、やはり５～６年から７、８、９年のところは、規範意識の中で情報モラルを厚めにやっていいのではないか。具体的にはまだ空欄にしてあるが、こういう書式でいいのではないか。裏に規範意識の各学年ではどうやるかという書式を作ってみた。

委員

実施時期に関しては、全項目とも各学年で少しでも取り扱うと思う。どの学年で回数や時間をとって重点化するかと捉えたほうがよい。

委員

中学校の場合、各学年でこの学年では何を重点してやろうというのがある。

委員

各教科でもできれば意識的に触れていくというような意味で進めてよいか。学年で５項目をそれぞれどこで重点的にやっていくのか。そうしないと、資料の集め方などが違ってくる。

事務局

例えば、学校行事の時期と関連させてとか、地域行事、または地域の方の教育力や、地域の方の力を得てできるものということから、何か時期が特定できるものがあればよいと考える。実際、道徳的実践がどうなっているのか。実践しているものから授業のほうに戻ってくるようなものを組むと、その時期が特定できるという思いはある。

委員

内容項目は、もう一つ作ることになるかと。裏は規範意識だけに重点をおいた書式なので、道徳も２、３回くらいしか入ってこないのでは。このほかにすべての内容項目が入ったものができる。６年生の規範意識、６年生の生命尊重…。ほかの内容項目がすべて入ったもの。全体の概念的なものが一つ。年間のものが一つ、そして月ごとのという形だ。

委員

具体的に教員が使う部分となったら、もっと細かいものがあると。

委員

学習期のどこで重点としてやっていけるのか。どの時期で行事とか地域との関係で持っていけるのか。そういうことを話し合いたい。まず、規範意識。これは、どのように進めていったらいいか。規範意識という場合、法律などであれば高学年にいかないとなかなか理解できないと思うが、例えば遊び方のルールや約束事というのは、先ほどの小学校の生活科で学習できると思う。そういったものも入れていいのでは。

部長

入ったときから必要。例えば、「廊下は右側を歩きましょう」という部分もそう。中学校は校則とか出てくるので、そういうルールを守るということは入ったときに最初にやること。

委員

そうすると、各学年の最初の時期という意味で例えば４月とか５月。中学は生活指導でやる。

部長

例えば、長い休みに入る前とか。

委員

規範意識は、中学校ではどういう形か。小学校だったら、身の回りに始めがあって、クラスの約束で、高学年になったら社会というのが入ってくる。

委員

最近はインターネットや携帯の使用によるマナー違反、ルール違反をかなり具体的に指導している。中学は、全校に２学期になると情報モラルの講話を行う。一番徹底しているのは情報関連と、いじめ。生命尊重にもかかわっているからである。

委員

新しい学習指導要領の巻末に道徳の内容の学校段階の一覧表があって、小学校１年から、中学校は中学校だけでくくられてしまっている。この間の成長のプロセスをどういうふうに位置づけていくのだろうかと気にしている。中学校の規範意識は基本的には子どもは知っていること。できないこともあるが、やはり認めてあげてスタートしようと思っている。要は中学校で起きているルール違反、マナー違反というのは基本的には皆常識としてやってはいけないという意識はある。でも、ときどきそれを無視して、自分の欲望を優先してしまう。だから規範意識を高めるために中学校ではどういう取り組みをするのかというと、新たな切り口を探して「ほら、ここを見失っているよね。もう１回原点に戻って、気づき直してみよう」と。いろいろな社会性とか現実で、自分で生活を組み立てていかなければいけないときに、立ち返って気づかせていくことが多いのではないか。小学校での規範意識とかルールにすごく興味がある。小中の校区別協議会に中１ギャップのことが話題になる。小学校の低学年をやってきた先生方がよくおっしゃるのは、「最近は幼稚園、保育園から上がってきた子は非常に難しい」と。例えば静かにしましょうとか座っていましょうとか、そういうことが身についていないという話をする。そのへんの実態はどうなのか。

委員

考え方になると思うが、いま小学校、幼稚園や保育園のしつけはすごい。ただ、校区の違いが少しあり、そこははっきり出てしまう。一見規律を守っていても本当にはわかっていない。それが小学校に入ってしばらくすると、崩れてしまう。

委員

小中一貫だから、一番初めに学校としてのルール・マナーを教え込むのはやはり小学校１年に入ったとき。その段階でどの程度の分量を教え、内容的にどういうものを教えたらいいか。私たちが規範意識と言っていることと、文科省が主として自分自身に関することというカテゴリーでまとめていることと、どういうふうに合わせていけばいいのか。ある程度マニュアル的なものを作って、今年だけではなく、次の学年も入学のときには同じようなテキストを使いながら、１週間の入学期間は同じプログラムをやって、積み重ねていくこと。それをきちんとシステム化していくことで、かなり乗っかっていくのではないか。

事務局

都教委が「小１問題」ということで調査をした。練馬区の情報を見たところ、「クラス全体が騒然とした落ち着かない状態になっているという状態がありますか」という質問に対して、多くの先生がそういった学級があったと回答している。途中から荒れるというのは限りなく少ない。４月当初から荒れている場合は最初から荒れたまま取り戻せない。多くは改善しないまま続いている。原因の一つに指導力不足も考えられるが、その場合に共通しているのは、指示やきまりを徹底していない、ということが多い。

アドバイザー

一般的な傾向として、見えない部分についてあまり大きく取り上げないのは問題であると思う。つまり、目に見えるような学級崩壊するとか、秩序が壊れてしまっているとか、こうした規範、行動が、一般的には規範意識の低下に皆押し込められている傾向もなきにしもあらず。私の考え方では、規範意識とは人格そのものもまず規範で、全体像みたいなものをイメージしている。それと今のような決まりとかルールを含めた礼としての道徳と、法としての部分が入っている。例えば、放置してある自転車に中学生は結構乗ってしまう。それで理屈をちゃんと持っている。これは規範意識が薄いのか高いのか、議論を呼ぶところ。大人社会がそういうことをきちんと説明できるような体制を作っていない。そうした面から考えて、最低限学習規律とか学級の秩序、集団の秩序とか、活性化とかをイメージした規範、決まりを徹底していくのは、今までもこれからも必要なこと。

小１プロブレムは、指導の問題もすごく大きい。そうした問題も含めてどうするのか。礼としての道徳。法としては明文化されたものがたくさんある。本学校ではこうした生徒をつくろうとか。重要な教育の指導上のキーワードは徹底ということ。言い方を変えると、例外のない規則を作ること。それを人間としてどうするか、学校としてどう考えるか。本部会では、そうしたものに対してどう強調し、具体的に指導したらいいかの目安を作ること。知り得ることと行い得ることの関係をどう考えたらいいか。これは昔からわれわれに突き付けられた非常に難しい問題。教育指導レベルで、少なくとも目指す人間像、児童生徒像と関連づけながら、具体的にはこういう規範があると意識させるという効果を持たせたい。

規範意識だけ議論してもたいへんいい問題が出てくるのではないか。悪いとわかってやってしまうのは、何が問題なのか。一つだけはっきりしているのは小学校に入ってくる１年生は、教えられないことをできない。中学生、高校生が皆わかっているけれどできないのは、その間の指導が家庭でも学校でも地域でもうまくできていない。一般の大人から子どもへの教育ができていないのがすべて学校に目を向けられる。人間としてしてはならないことを、なぜ学校ですべて教えるような文書の書き方をするのだと私はよく言う。各家庭や地域社会でいろいろなことについて伝えてきた。ある意味では生活や生き方の知恵も含めて、副次効果で広がりを見せるだけでもいいのかという思いがある。

委員

規範意識を１年生に教えたことが２年生にどうつながっていくのかを把握することが大切である。しつこいぐらいに繰り返しいかないと、規範意識は育っていかないと思う。

委員

今聞いて、規範意識って何だったのかと思うようになった。どういう規範意識を持った生徒にしたいのかが、先生によってバラバラの状態。だから、規範意識を高めようと言ったときに、この学校でこうというのがないと、持っていきようがない。ほかの項目もそうだが。

委員

３期のその節目のところで、やはりきちんと確認していかないととんでもない方向に流れる。子どもたちはそのすきを見て、あまり話を聞かなくなってしまう。

委員

いま出ている五つの項目、例えば規範意識でこういうような子に育てようというのがほしい。それがないと、その方向に皆が進めない。それぞれが勝手に思っていては、なんとなく違ってしまう。それと、思想教育。考え方を統制するなんていう意見も出てくるかもしれない。

委員

どういう子どもにしたいというのがあって、それを受けて、そのあとで、各学習期の目標、児童生徒像がある。例えば、規範意識に関して、各学習期の目標、児童生徒像をこういうふうにえがきたい。思いやりの心、自尊感情でも、それぞれ作っていきた。

委員

自尊感情というのは自分に自信があって、発表ができるようになる。

思いやりだと、小さいうちは「泣いている子がいたら、聞いてあげましょうね」とか。

委員

生命尊重は自分の命、他人の命を大事にすることである。

事務局

生命尊重については、中学生では、自ら命を絶つということがこれまでにもあったことを考えると、Ⅱ期あたりから重点的に指導していくことなのか。しかし命の大切さについては、道徳の心のノートを見ていくと、小学校１、２年生で、保護者からの手紙をもらうことや、赤ちゃんのときの写真が載っている。

委員

自分の命を大切にするということは、積み重ねが大事である。だから、１年から少しずつ命の大切さを教えていくことが必要である。

委員

他に、「うそをつくのはだめ」と教えるのも大切。年齢は、小さいうちから、例えば、幼稚園生から。

事務局

先生の見ていないところで、わかっているけど悪さをするとかいうのは発達段階でみるといつぐらいか。

委員

３年くらい。

アドバイザー

３年というのは相当程度、科学的なもの。自我の発達という発達の順序性からいうと、それが出やすい傾向の時期でもある。

委員

少し自分を優先させてしまうところがある。友だちと一緒になって楽しさを優先、教員の見ていないところで、普通はやらないようなことをやってしまう。そして突き詰められたときに、やはり、うそ、ごまかしをする子がいないとは言えない。

アドバイザー

傾向としか言えないが、「今やろうと思っていたのに」というセリフ、これは３、４年生に特徴的に出てくる。誰が教えたわけでもなく、どういうふうに相手の要求をクリアして自分自身を認めさせるというように、自我の目覚めでもある。学校教育がこうであるからということだけでは説明できないし、教育できない世界でもある。これが心の問題の難しいところ。先ほどのうその問題で言うと、うそをついたことによって生活、情緒が安定する環境になっている子どもは、間違いなく平気でうそをつく。ところが、うそをつくと厳しく、内的な面で本人が納得するレベルまで繰り返しやっている環境に育つ子どもは、うそをつく回数が減ってくる。そういう子どもは比較的自分に対してもうそをつかない傾向が出てくる。顕現化してくるのがだいたい10歳前後からで、ほかの人にもよく見えるようになる。

そうした面から、精神とか心というのはどんなふうに形成されるか、大まかな流れはある。だからこの時期のポイントは何か、いかにコンセンサスを得ながら進めるか。これが私の考え方である。一応枠づけとしては粗々でいいと思う。そんなに精緻に綿密に練り上げていくのは難しい。とにかく、ある程度学校教育ということを限定する。先ほどの規範意識の場合でも、学校における集団生活を最大リミットという考え方で歯止めを効かせておくと議論がしやすい。

Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期と分ける意味について。一つは危機管理として、日常の教育活動が初期の目的どおり機能しているかどうか、チェック体制をきちんとするということ。ある時期に学校全体、あるいは児童生徒個人も含めて、もう一度振り返ること。特に心の場合はどう振り返るか。この枠組みの中でこういう児童生徒像を目指してアウトラインを作っておきながら、その中の各項目に本部会ならではの議論したようなものを入れていくと大枠としてはいいのでは。

もう少し言うと、生命は難しくて、発達という感覚を入れるとなると私もお手上げ。なぜ、人が死ぬと悲しいのか。説明がつかない。なぜ命が大事かを子どもに考えさせても、子どもは考えない。人が死ぬと大勢の人が悲しむということでしか、言葉として説明できる有効な方法を持っていない。人の命はなぜ大切か。「やっぱり死んじゃいけないんだな」という素朴な感情、気づきがどこで生まれるのか。今までの社会、イニシエーションが比較的しっかりできていた時代は、誰が教えたわけでもなく、そういう体験を子どもが生まれて 10 年くらいの間にたくさんしてきた。ところが、今は地域社会での伝わり方が非常に弱くなっているのではないか。したがって、命の大切さを感じとらせることが大事だと指導では言っても、なかなか難しい。今の日本の社会は汚いものを子どもに見せない。大きな方向性としては社会の状況の中で育つ子どもの中で、これはやらなくてはならない部分。何をどうしたらいいかというところに、ポイントを外さないものを用意していくこととしか、今のところ言えない。

委員
　ほかの自尊感情、思いやりの心、社会連帯にも話を進めていければ。

委員
　われわれが小中一貫の９年生の学校の職員になったときに、自尊感情でどういう姿をゴールにするのかということ。そのゴールに向かって、Ⅰ期やⅡ期、Ⅲ期では一体どういうふうにしていくかと考えていくのが一番やりやすいと思う。

委員
　自尊感情を少し絞って、中学を卒業するにあたって、そのときにどういう生徒に育てたいか。

委員
　高校を選ぶとき「僕はこの学校でがんばるんだ」という気持ちを持つこと。進路を自信を持って言えるということ。

委員
　進路では「自分はここでいい」と、個性と能力で決めている。能力に関して、自信というのが何かキーワードのような気がする。

事務局
　現状としては高校の先を見通して進路選択をしているのだろうか。

委員
　一応考えさせられるように努力して、そういう勉強をさせるが、考え終わったらお終い。

委員
　毎年 7、80 人くらい進学のための面接練習で見てきて、将来の夢を聞いてもあまりない。「大学に行くためにここに行きたい」という生徒が多い。反対に、工業学校などに行きたい子は「将来、こういうものづくりをしたい」と面接ではきちんと言ってくる。自尊感情に絞って考えてみて、自分の個性・能力または進路に自信を持つ、また自信を持って人に言えるような感じを持てればいい。それに対して、どのように各期または学年ごとに指導していったらいいのか。または、どこで重点的にやればいいのかという話をしたい。

アドバイザー
　今の自尊感情は非常にわかりやすい。もう一つ、自尊感情が高いのは何がいいかというと、逆境に強い。はね返そうという気持ちが強い。だから、自分に対する自信につながる。自信の中身として程度の差はあれ、そういうものを持っている生徒は結構いると思う。そうした子どもたちは、なぜそのように育ってきたのか、学校教育だけではないというのはわかるが、説明できない、証明できない難しさがある。でも、学校の教育がゼロというわけではない。小学生でいえば、小３くらいが一番自尊心が高い。小５、６になってくるとだんだんわかってくる。

学校の先生も親も下げる意図はまったくないのに、実質下げている。ブレーキを引きながらアクセルを踏もうとしている。それぐらい難しい。だから、そのために具体的な言い方で言えば、最後まで粘り強く先生が応援していかないと自尊心の根っこにつながっていかない。自信につながっていかない。どうも最後は方法論になってしまって、なかなか何々像に結びつかないが、もし結びつけるとすれば、自信を持って、こういう行動ができる何年生。そういうフレーズならば考えられるか。何歳の頃には、こういうことに自信の持てる子どもみたいな。

委員

生徒本人が自尊感情が高いかわからないが、行事等で一生懸命やる子たちは、皆から少し尊敬されて活躍している。そんな子はリーダーに見えて、生き生きしている感じがする。

アドバイザー

心だから全員同じ形になる必要はない。その根底に流れているものが「自分だって結構やるじゃないか」という感性、感覚みたいなものを生徒が持っていて、その心をつかみとると、先生はものすごく信頼されると思う。やればできるじゃないかという部分が感じとれたら、すごく自信になると思う。そういうものをセッティングしてあげること、条件整備だと思う。

委員

運動会や文化祭など行事を中心になって仕切ったというのは、自信につながる。教師の中には、行事でがんばるが、勉強ができないと少し残念だと思う場合がある。またそれが生徒本人にもあって、やはり自信が萎える。

アドバイザー

それはパラドックス。「俺はばかだけど、こっちはできるよ」という自尊心はある。口では言わないが、そういう生徒は自尊心はあまり下がらない。反対に、運動ができなくて委員会も何もやらない。勉強だけできる子は自尊感情があまりない。それが人との関係。認められていないというのが一番かわいそう。人の中で生きているという感性が弱い。

委員

たしかに、スポーツとか芸術的な活動ができる子というのは自尊感情があるかもしれない。ただし、点数がとれるのを今もって重視している傾向がある。子どもたちはそれをどういうふうにとらえているか。

アドバイザー

何かのために何かの目的があって、自分が何かをやるような場合はそれほど下がらない。ところが、大人は成績がいいことを悪いとはしていない。それがあるところに偏っておかしいと思っていても、点数そのものがよい点数をとれば誰もが悪いとは言わない。だけど、動機とか見方とかいろいろなものが偏ってしまうと、それはおかしいと思いながらも叩けない。だから、大人を喜ばせるためにはどうしたらいいか、子どもが一番知っている。小学生は正直にそれが出るから、素直で親の言うことを聞く子が大量にできる。そういう教育はだめだと思っている。

つまり自尊心を考えるときに、教育活動の中で目標値を挙げながら、最低限ここを押さえていく。あらゆることを、皆と特化してやってしまうとなかなか先に進まない。

委員

今日はかなり突っ込んだ話にいけた気もする。規範意識、とくに自尊感情について話をした。その中で、この時期にこれをやる、こういう生徒を作っていくという進め方だとなかなか難しい。反対に、ある程度最終的な目標を持って、さらに各期または学年ごとでもいいが、こういう子どもを育て、そのためにどういうふうにわれわれが指導を展開したらいいのかというようにもっていければと考える。そのようなことをまた宿題で次回までに考えていただきたい。皆さんが一貫校に勤めたということで、最終的にどういう子どもを育てたいか。余力があれば各期をこういうふうにやりたいということ、さらに各学年ではどうするか。そういうことをできれば５項目で、無理のないところでまとめてきていただきたい。

部長

とりあえず順番を決めて、最初に規範意識、次に自尊感情、思いやり、生命尊重、社会連帯。行事とかに照らし合わせたら、この時期にはこれがいいとか当然ある。一つの流れを作って、必要に応じて入れ替えることも可能かと思った。

事務局

今年度の報告書は、11 月に原稿の形ができてくるとありがたい。12 月に最終的に入稿用の原稿を。

委員

資料作成の分担と、部会の第一次報告書のプロットという案を分担しながら作成していかなければならない。少なくとも５人程度の方々に携わっていただかなければならない。

事務局

次回日程は９月の 15 日。その次が 10 月６日。11 月５日。12 月１日すべて 16 時で。

委員

五つの項目を考えるときに、成長のプロセスを留意した方がいいというのが前回一番心に残った。それはすごく大切なことだ。では、そのゴール像がある程度見えてきて、規範意識をどこまでポイントでやるのか。成長のプロセスで前回触れられたのは、自分を認知する力がどういうふうにどんなプロセスで、どの時期にボーンといくのかとか。人間関係を作る力はどの時期に重点的にやったほうがいいのか。

中学校の３年間については、一言でいうと注入は難しい。最終的に中学校では進路教育とかキャリア教育という感覚で、自己肯定感とか自信をどういうふうに持っていくのかを３年間やっていく感じ。将来こうなりたいと本当に思っているとは私は思っていない。そんなに大きく中学校の３年間で飛躍的に伸びていくかといわれると、発達段階として２年のときにどう乗り越えるかみたいなのはある。それよりも小学校の６年間でものすごく大きく変わっているので

はないか。そのへんがある程度雑ぱくなものでもあれば、「この時期にこんなことをやろう」と、生かせる資料になるのではないか。

委員

次回はゴール像、もしできたら、その各期とかプロセスに生かせるような子ども像を書けるだけ書いていただければありがたい。

私が今日持参したカラー版（資料）の方は、この部会が一貫校だけではなく、小中の連携に使えるもの、どうやって学級担任や教科担任が各教科等の領域等を指導していったらいいのかまとめたもの。一貫校ではある程度できるのかもしれないけれども、連携ではなかなか難しいかもしれないが、徐々に互いが行き来してやることが連携に弾みをつけてくれると思っている。

裏面は、われわれが今やらなければいけないことの案。今年度の資料を具体的に作成することと、来年度のこの分科会独自の資料作成にあたってどういったものを作るのか。予算の裏づけとなるものとして、私はこのような冊子を作るのがいいと思った。ただ、これは 10 月６日の部会で最終的に提示しないと間に合わない。それまで少し考えていただきたい。

委員

小学校から見ると、自尊感情に関しては中学校の方がかなり努力して進んでいると思う。学級委員長は今いない。それにはやはり小学校の事情があって、どの子も同じにしてというのもあるだろうし、悪い意味でいうと逆境を与えない。それで中学校で変わる。それがある意味、中１ギャップになるのかもしれないが、変わっていく。だから、小中一貫で９年になったときにうまく接続していけたら、自尊感情などもいいものになっていくのではないか。

アドバイザー

今日はいろいろ混乱させて申し訳ない。自尊感情を日本の文化の中で育てるのはなかなか難しい状況にある。しかし、チャレンジし続けることによって、ある程度逆境に強い子どもを作ることができるのではないか。それは育て方の問題として、先回りせず、子ども自身にものごとを決定させる習慣を、具体的なレベルでやってほしい。もちろん、年齢に応じて、あるいは能力の相応程度のものを。それは親の能力が問われる。二つ目は、加点式評価をベースに相手の存在を認めることからスタートし、子どもを育ててほしい。これは私の体験に基づいている。公立学校で教員をやったあと学芸大の付属小に行った。小学校４、５、６年生に過酷な２時間遠泳の体験をさせる。これをやった子どもは強かった。時期が大事、時期を外したら難しい。言い方を変えれば、努力すれば乗り越えられる課題を提示していくのが問題解決型の一つの精神。学校はなかなかそういかない。平均、合間、合間とやらないとうまくいかないと思う。